

 書評

松下正明, 田邊敬貴 著
 山鳥 重, 彦坂興秀, 河村 満, 田邊敬貴 シリーズ編集
《神経心理学コレクション》ピック病
 二人のアウグスト

兼本浩祐

**臨床に対するくめども尽きぬ愛着があふれる
対談**

眼前に酒とさかなが目に浮かぶような何とも楽しそうな対談集である。臨床に対するくめども尽きない愛着がなければこのような対談とはなるまい。

二人のアウグストというのは随分としゃれた題名だと思う。ピック病とアルツハイマー病というわれわれが精神科で出会う 2 大認知症の第一報告例が、いずれもアウグステとアウグストという同じ名前を持つ男女のペアであるなどというのは何という歴史の偶然であろうか。

ピック病を知り尽くした田邊先生と医学史的な陰影をそこに添える松下先生の掛け合いが、本書に深い余韻を生んでいる。ピック病という 1 つの疾患をめぐる議論をお二人と共にすることで、精神科医がある 1 つの臨床像を本当の意味で学んでいくということの奥行きを深さを、われわれはこの対談を通して教えられる。

松下先生も触れられているように本書は半ば田邊先生の遺稿という意味も担うことになった。私が田邊先生と最初にご一緒したのは、大

橋博司先生の失語症の症例検討会でのことであった。気さくさと率直さ、これと信じた人(当時は大橋先生)への一直線な姿勢が先生からは感じられ、ともかくも自分の学問のためにはどこへでも真っすぐに通って来られる様子がとても印象的であった。

田邊先生は直言の人でもあったと私は思う。しかし時に辛辣な内容の意見を直言されているにもかかわらず、その私心のなさとしち居振る舞い全体が醸し出すユーモアのために、田邊先生に本気で怒っている人を私はあまり見かけることがない。語義失語を通じてのピック病の診断など、本書にも随所に田邊先生が自らの体験の中から取り出された「田邊節」とでも表現すべきであろう言い回しが見受けられる。松下先生の絶妙の受けが、まるで田邊先生が本当にそこで話されているかのような雰囲気や本音を本書に与えている。一読してさまざまに臨床の味わいを深める一冊であることは間違いない。

(愛知医科大学精神科学教授)

●A5 300 頁 2008 定価 3,675 円(本体
3,500 円+税) 医学書院